
異世界でお医者さん目指します。

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でお医者さん目指します。

【Nコード】

N8859Y

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

病で死に、次に転生した先は魔法とファンタジーの世界だった。前世での記憶があるアルトは、その知識を生かしながら前世で自分を死に追いやったそれと唯一闘える職業、『医者』を目指す。

けれど、彼の周りには天才画家や最強美人など、奇怪で変人な連中ばかり。しばしば騒動に巻き込まれたりドタバタしたりはするものの、ほのぼのとマイペースに医者への道を歩いていく、ほんわか異世界物語。

この小説は、主要登場人物が主人公以外、ほとんど女の子と

なっております。そういうのが苦手な方はご注意ください。

お医者さん目指します

急性硬膜下血腫。

頭蓋骨の内側で脳を包んでいる硬膜と、脳の間に出血がたまって血腫になったもの。

何かよくわからないが、そんな病気で俺の生涯は幕を閉じた。高校三年の秋だった。病気でぶっ倒れた時は「ああ何でこんなことにと散々悔やみ泣き絶望し……。色々あったものの、いざ死ぬ直前となれば「いい人生だった」と年甲斐もなく悟ったものだ。

そんな、前世だった。

転生……といえば聞こえはいいが簡潔に言えば来世。俺はまったく違った世界で生まれた。

そこはよくゲームで遊んでいたファタランジーナな世界で、魔法や騎士、ヨーロッパ顔負けの幻想的なもの。城壁が都市をぐるりと囲み、その中で国を治める王様が民を守り、また導く。

国の名はザヴェード。

約百年前まではこの世界で大地を二分するアシュランと戦争（冷戦ともいえる）状態であったが、何人かの集団によって協定が結ばれる。たった一つの集団に？ おいおい、そんな非現実的なことあるわけないだろう。戦争を終わらせたんだぜ。十中八九、何かしらの要因があるのだろうが、それを知る方法や術は当然ながら俺にはない。

今思えばこういう疑問が当然出てくるし、その答えを知ろうとも思うのだが、結果として世界が平和になったのは事実であり、何だかそれを探るのも野暮なような気がする。特に問題もない。知りたいたとは思うが、死ぬほど切望していることでもない。そんな世界の

概要を知ったのも……俺が五才の頃。

丁度、前世の記憶を取り戻した時期と同じ。

高熱を煩って、三日三晩寝込んでいると、夢の中で前世の物語が段階的に始まって……一日一章ずつの全三章構成だった。誰が作ったんだと突っ込みたいが、まあ記憶が戻ってしまっただのなら仕方ない。最初は変な夢だなと思ったけど、最後の三日目。

一気に前世での生涯全てが身体全体に入ってきた感覚になった。上手く表現できないんだけど、寝ている自分の中に光る粒子がフワアアと流れゆくもの。そうして、前世での記憶がはつきりとありながら、俺は今を生きることになった。

あっちの世界では悲しい最後を迎えていたが、こっちの世界ではそんなヘマはしない。

何故かって？ そりゃ……ね。

自分、お医者さんです。

王都ザヴェードの中にある一軒家、『シャーロック医院』の一人息子。

それが俺こと、アルト・シャーロックだ。仲がいい人からは「アル」なんて呼ばれてる。

記憶が戻ってから十一年。現在十六歳。

正直言えば、何度かあっちの世界でのことも想った。それは確かだ。今の生活からしてみればそれはもう凄くて、超技術にして未来的だ。ネットで毎日動画や海外のニュースとか見ていたあの頃を懐かしく思う時もあるさ。

けどね、けどさ。

こっちも負けてらんないぜ。ゲームの世界だけとってた、科学ではまず解明できないだろう『魔法』。王国騎士。西洋の景色や街並み。何百というギルド。

前世では将来設計や周りの目とか、そんなある意味息苦しいとさえ思えた毎日が、ここにはない。あるのは今この時を楽しく、刺激的に過ごすという人間たちの賑わい。そして己が野望や想いを成就させようと動く時代。

いいね、すごく。こんな世界も、あつたんだ。

だから、俺はこの世界が好きだ。あの世界を知っているからこそ、この世界が好きだ。

何より、今はやりたいことがある。目指していることがある。

俺の生涯を終わらせた病。それと戦うことが出来る唯一無二の職業。さらにはそれを目指すのにこの世界では『魔法』とかいう常識が付いてくる。それもこれも、俺の努力次第ってなもんさ。やらないわけにはいかないさ！

さつきも述べたけど、幸いこの世界では丁度戦争がなくなった。戦争に駆り出される心配もなく、自分のしたい道、やりたいことに一生懸命猛進できる。そういう環境が整った世の中。やるかやらないかは、自分が決める。決められる。

「いい天気だなあ」

そう言って、二階にある自分の部屋の窓を開けた。朝日が眩しく身体をつつむ。

ここ数日雨続きだったけど、どうやら今日は晴れのようだ。天気

予報がない今だから、その日その日で天候がわからないってのこの世界ならではか。

めでたく二回生となった俺が迎えた、最初の学期試験も無事終えて。

今日は現在俺が通っている医術学校の、年に三回ある試験のうち、一番目の試験が終わった翌日。一回生の頃は結構しんどかったけど慣れてくると案外大丈夫だったりする。普通の学生ならこのまま学校へ行く準備をして向かうのであるが。

俺の場合、ちょっとした朝の通例があるのだ。

「アルト！ 起きてるならユナちゃんのところに朝ごはん持って行ってくれるー？」

「はいよー」

そう。

あいつに、彼女に朝食を持って行かねば。

その子は、ザヴェード王国随一の画家にして、俺の幼馴染。どうい子かって言うと

「アルト！ 起きてるなら返事しなさい！」

「さつきしたじゃないか！？」

ああ、もう。さつさと行けばいいんだろ。父さんとは違って母さんは短気なのだ。

すぐさま一階に降りて彼女の朝食であるパンとスープ、それにレタスを持って（あれ？ 俺のがない）家を出る。そこは城下町であり、人々の生活の場。

小さな子供たちがふざけ合いながら学校へ行く姿。馬車に乗った貴族が遠出するのかガラガラと道を下っていく姿。新聞屋である二

コルさんが自転車でパフォーマンクスしながら新聞を配る姿。美味しそうなマフィンを路上で売買するおばさんの姿。

一人一人、今を生きる人々。俺も例外なく、その一員。

「わるくないね」

うちの家から道を挟んだ向かいに彼女の家は建っている。

家を出ればすぐ目の前だ。別に俺が持つていく必要はないんだけど、俺じゃないと彼女は拗ねてしまう。天才と呼ばれているのに、中身は意外と幼いのである。

馬車が通り過ぎた後、ニコルさんに手を振って、マフィンを売っているおばさんに一礼して、俺はその家の扉を開く。合鍵は常備持っているので大丈夫。……あいつが鍵閉めたことなんてないけど、俺がいつも閉めているんです。無用心すぎるだろ。

そう思いながら、扉を開ける。これも一つの日常に過ぎない。

けれども、前世の記憶がある俺にとっては毎日がとても新鮮で、面白いもの。異世界にて、医者を目指す青年の、どこにでもある、平凡な物語

……だいいいな。

天才画家

ラテン語で絵のことを「ピクトウーラ」と言うそうだ。英語の picture の語源でもある。

前世での記憶もかなり曖昧なれど、たまに役立つときもまああるもので。何故、そんな話をこんな異世界でするのかというと、意外や意外。不思議と世界は繋がっているのかもしれない。

この世界で、「画家のことを「ピクトウー」と呼ぶそうだ。正直驚いた。

んで、ある少女のことを敬意を表して“ピクトウ・レックス 画家の王”と総称している。誰のことか。決まっている。うちの向かい側にデデンと建っている家に、一人で暮んでいる我らがザヴェード王国随一の天才画家。

ユナ・L・サルジェリアである！

「起きろよ、天才」

「……あー」

埋もれている。正確に言えば下敷きになっている。

キャンパスに絵の具、模造紙にバケツ。色紙と水彩用紙に、筆に折りたたみ椅子。スケッチブックに帽子にバッグに水入れに水筆に布切れに固形絵具に本に辞書にコップに皿におやつにパンにスカートにダウンにランプに……あれこれ他多数。

ここ一週間、俺は医術学校の専門試験の最中であつたため、朝と夜（昼は食べない主義らしい）は彼女の家の扉を開けてすぐ下に食事を置き、そのまま全力疾走で学校に行っていた。母さんがいつもそれを回収するのだが、昨日から何故か食べた形跡がなかったらし

い。

食べなかったのではなく、食べれなかったのだ。

「いつも通り、ここに朝食置いてさっさと帰ってもいいんだが？」

「あー。あー。あー。……あ？ おお？ その声はもしかしてアーちゃん？」

「もしかしくなくても、そうですが」

「おおお！ アーちゃん、アーちゃん！ 助けて、今にも死にそうなんだよお！」

埋もれている残骸の下から、その女の子は精一杯の声で助けを求める。

「一日何にも食わずに生きてるんだ。別に助けなくても大丈夫ですよ」

「うん、まあそうなんだけどね。別にこのまま一人で死んでも特に問題ないかなあと思っていただけだね。でもね、でもさ。今ボクの近くにいたのがアーちゃんなら話は別だよ。ボクが世界で一番側にいたいアーちゃんがいるのなら話は別さ。ああ、アーちゃん。今ボクはすっごくここから抜け出したいよ。迅速に的確に今すぐここから飛び出したいよ。でもね、でもさ、アーちゃん。えとね、何故かボク、抜け出せないんだ。何でだろう？」

とても一日中飲まず食わずの女の子のテンションとは思えないほど、彼女の口は元気だった。

まあこれだけ体力や気力があるのなら、あと数日はもつのだろうが、ここで俺が帰ってその反動で自殺されても困るので、やれやれとばかりに埋もれている彼女を救助する活動を始めた。

ついでに、一週間ぶりに部屋の掃除と床拭きもかねて。

余談だが、救助中も彼女の口は引つ切り無しに話していた。

「やほやほ、元気だったアーちゃん？　ここ一週間全然会えなかったけど」

「学校の試験中だったんだ。ユナの健康状態も気にはなっていたけど、まさか埋もれているとは思わなかったよ」

「うん。ボクも埋もれちゃうとは思わなかったよ。ふと食べ物に絵を加えたらどういふ作品になるのかなあ、なんて思ってたらいつの間にか埋もれちゃってて。困ったね」

「俺はお前の思考に困ってるよ。何だ食べ物に色加えるって……。

あとさ、いい加減」

「ん？」

「『それ』止めないか？」

「嫌。じゅーでんちゅー」

現在、目下。

ユナは俺に抱きついている。抱き憑いている。駄き付いている。彼女の紹介については、もう特にする必要はないだろうか。たった今お送りした一連の流れで充分であろう。ユナ・L・サルジェリア。ザヴェード王国随一の天才画家なのだが、中身はかなり変わっている。同じ十六歳とは到底思えないほどの人格者である。

（本人が長いと邪魔という理由で）髪はショート。色はエメラルドで、瞳も同じだ。

画家ということもあり、服装には常に絵の具やらペンキやらがべったりくっ付いており、逆に可憐なドレスやワンピースを着ている姿はまず見たことがない。最後に見たのは、四才ぐらいの時か。

彼女は、一人暮らしである。

理由としては、この世界ではよくある話で両親が出稼ぎしている

最中に崖から転落死したというもの。盗賊や野犬に襲われなかっただけマシなのかもしれないが、五才の誕生日を間近に控えた彼女にとって、その事実は衝撃的なものであった。両親の死を聞かされた瞬間、ユナは卒倒し意識不明に陥る。そして、二ヶ月後奇跡的に目を覚まし、一心不乱に絵を描きたいと言い出して、初めて描いた作品が……。

現在、ザヴオード城の大広間の中央に飾られている。

タイトルは、『ノウス』。意味は『今』。

光と闇を半々に分け、見る人によってはどちらにでも解釈できる至高の一品。描いた彼女に実際はどちらなんだと聞くと、彼女はどちらでもないと答えた。これにより、ますます『ノウス』に対する画家たちの議論は過熱していく。

だが、実際は彼女にとって本当はどちらでもない。というものはなく、どうでもいいが正解なのだ。

ユナは自分が描いた作品が完成すると、それは意味がなくなつたと解釈し、過去の遺物として処理する。ゆえに、その作品がどうなるかと、どうあるかと、どう見られようと、特に興味はない。

そして付け足して言えば、『ノウス』が現しているのは光でも闇でもなく、悲しみである。それに気付けない自称お偉い評論家たちは全員阿呆だと思う。ユナだって一人の女の子。それを考えれば答えは一つしかないだろうに。

「アーちゃん……」

「あ、ごめん。怒った顔してた？」

「うんにー。そういう顔も好きだからいいよー」

そうして、彼女の身柄はユナの両親の親友であつた俺の両親が引

き取ることになったのだが、噂になった『ノウス』を国が買い取る
と言い出して、莫大な賞金が彼女に手渡されたため、現在彼女は一
人で何不自由なく暮らしている。

が、やはり。金があっても動こうとはしないので、こつやつて生
活に関する面倒はうちが見ているのだが。メイドでも雇えばはるか
にいいだろうに。

と、いうわけで彼女についての概要は以上である。

まだまだ説明、補足したいところもままあるが、それはゆつくり
と付け加えていきたい。

なにはともあれ、彼女が俺の周りにいる幼馴染にして変人。

天才画家こと、ユナ・L・サルジェリアである。

「えっちいこと、しよ?」

「却下だ」

よし、学校行こう。

最強美人

朝日に照らされながら、ユナの家の前で俺は背伸びをする。

「相変わらずアーちゃんは努力家だね」

「そうでもないさ……」と。よし、そんじゃ行ってくるか。多分、今日の昼頃にマードラさんが来るから。描き終わった絵画、ちゃんと渡しとくようにな」

「うい、了解だよ。今日も勉強、行つてらっさーい」

「ああ。行ってくるよ」

そう言つて俺はザヴェード医術学院に向かう。

ザヴェード王国は、四方八方十六方、グルリと城壁に囲まれた国の要塞だ。門は東西南北に存在する。外から門を通り中に入れば結構な深さである堀が見えてくる。当然そのまま落下するわけもなく、橋が架けられていてそれを渡っていく。そうしてようやくザヴェードへ入国することが出来るのだ。

戦時中であつた王国を守るために建設された国という名の守り。今となつては『もし反乱があつた場合』のためという理由でその要塞は意味をなしている。

北西の方角に向けて地面は盛り上がつていく構成となつていて、その一番上にお城がデデンと聳え立つ。お城からはさぞかし眺めがいい景色なのだろうなあ。一度見てみたい気もするけど、そうそう城に入る用事などない。貴族ならまだしも、医者俺では到底……と、いうわけもなく。

実は私、只今そのお城に向けて歩いていつているのです。理由はもちろん、城の領地内部にある学校に行くためで。

「相変わらず豪勢な学校だ」

王国内にある、ザヴェード城領地において、東に位置する土地は全てこれの敷地内とされる。ちなみに、西は騎士学校で、南は魔法機関。そして残りの北の範囲内を城やら貴族街やら色々ある。

医術と、武術と、魔法と、城。それがザヴェード四大箇条である。この四つがあつてこそその国が長きに渡り繁栄を守り続けてこれた理由だ。もう一つの大国、アシユランは魔法に対する研究を最近弱めて別の何かに力を向ける動きがあるそうだと、マーデラさんが言っていたな。何をするかは知らないけど、それが国のため、世界のための動きとなればいいなとちょっと思っていたりしている。

あ、余談だがマーデラさんは軍人の方。主に経理部門の方で、その仕事の一つがユナの絵画確保だそうだ。ユナの絵はザヴェード中で人気だから国が責任をもって保管しているらしい。すげえ。

そうこう思っているうちに校門へ到着。

現在俺は全五回生ある中の、二回生。ようやく一年を通して医術学校に馴染んできたところだ。最初の一年はそれはもう大変できつかったのを憶えている。けれど、やっぱり人間は環境に順応するもので一年すればもう慣れてしまった。

が、一回生はそうも言つてられない。つい先日まで初めての試験だった彼らは今日お休みである。理由は年に三回しかない試験の一つを受けた彼らに休息を与えるため。最初の試験ぐらい、ゆっくり休ませてやろうという学校側の計らいである。

そんなわけで、今日は二回生から五回生までの登校となる。門をくぐり、『フォトン』と呼ばれる虹色の並木道を通りながら歩いていく。医術学校と言っても試験の合格点さえ出せば次回生に

進級できる制度で、最低限の素行さえあれば服装やら人格を問題視されることはない。

つまり、結構フリーダムな輩が多い。

でもしかし、一応入学試験というのもあってそれに合格できないと当然入れない。しかも結構難しいんだなこれが。倍率は……えと、大体毎年四百倍だっけか。歴史あるザヴェード王国直属の医術学校。しかも階級、出身問わずの完全能力・結果主義をモットーとしたこの世界では考えられない制度だ。

階級・出身がすごい輩は大抵『そっち系』の学校に行くしね。そんな一般人からやや外れた連中が集う学校であって、暇になることもないし何気に楽しかったりする。

虹色の花が彩る、並木道を歩いていると中道にドーンと存在感全開の像が見えてきた。

いわゆる、前世でいうと『初代校長の像』だ。もう随分と昔っぽいらしいがその姿はまさに学生たちの鏡。それらしい帽子を被って右斜め四十五度って感じ。いやあ、どの時代でも同じなのね、こういうのは。ちょっとだけ親近感湧くよ。

「いっつも俺らを見守ってくれて、ご苦労さん」

そんな、柄にもないセリフを言いながら、光を反射する眩しい像へ微笑んで。

鼻歌片手に像を通過。すると、何故だろう。足元を風が速く通り過ぎる……ハハッ、これはあれだな。俺の柄にもないキザなセリフに初代の校長が照れちまったか。

まったく、女子にするならまだしも男の俺って。

クルリと振り返り、心の中で『おいおい』と突っ込みを入れた俺の目の前で。

像の頭が吹っ飛んだ

「……………おお」

つい、そんな感嘆な声を上げてしまう自分。見れば、初代校長のキラリと輝くその頭部は今や跡形もなく消し飛び、さながら首無しと言ったところであつた。

って!?

「なんじゃこりゃああああああ」

「おお、やっぱアルトじゃん！よかったぜ、上手く止まれて」

止めれて？ 止まれてだと!?

どこをどう見れば校長の頭がなくなったことで止まれるんだよ！
ったく……さっき吹いた風は校長像の恥ずかしさじゃなかった。
きつと、助けてくれと俺に言いたかったのだろ。すまん。

「もう少しマシな登校は出来ないのかよ、お前は」

「ははん。それは無理だぜ、我がライバル」

数秒遅れて、着地。どうやら蹴り飛ばした後はそのまま空中にいたらしい。

降りたつた場所は当然今や無き像の頭付近。なんと罰あたりな。なんと豪快な。なんと変態な。

オレンジ色と黒色の、かなり目立つ髪型をなびかせて、その女は俺を見下ろした。

「おはよん、アルト」

「……おはよう、ララ」

ザヴェード医術学校、二回生主席。歴史ある医術学校史上『最強』と目される女。

ララ・アディエマスの登場であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859y/>

異世界でお医者さん目指します。

2011年12月17日18時12分発行